

## 問題

次の文章は、江戸時代の随筆『折々草』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

(50点)

1 若狭の国三方郡早瀬といふ所に、いと貧しくして住む女の、名は糸といふが、舅の翁につかへ侍りし事のまめだちたるぞ、ためしなきみさをに侍るなり。

翁は七十年ばかりにて、世にいふ老病などいふけにや、心も愚かになりて、いはけなき子のごとく\*泣いさち、A朝夕のたうべものなどは時ならぬものを好み出だして、せむすべきなきことあまた度なれど、すこしも其翁の言にたがはずとり作りて参らせける。

冬のほどなるに、風吹きあれ雨うちしぐれて海のうちへもいとあらく、漁夫どもも業をおこたりて、いとかなしくおもひ居りける比、此翁「真魚のいとよきをたうべむ」といひ出だしけるに、七日ばかりも日しけて侍るに、真魚とてはこれらの海辺にはいづべに行きて得むかたもあらず。さはとてなしともあらずともいはむすべなければ、天地の神にこひのみ(1) いかにもして真魚をば得てしがなといのりけるに、しるしもあらず。さまれ海畔を立ちありきて見むに、(2) 波にうちよせられて侍るなどもなからましやおもひつきぬれば、いと寒き朝風にふかれて、か行きかく行き見けれど、さるものも得侍らず。「こは我心のきたなく侍るによりて、神の申すことをきこしめさぬ也。今はせむすべなければ、いかにも翁をいひなくさめて、そらのけしき海の心のなほり給はむまでは、ともかうも物つくりて参らせむ」とおもひしかば、泣くく家にかへれば、翁はのりさけびて、「真魚くはむく」とぞ泣き居ける。此をみな、かきさすりて、「唯今漁夫どもが舟どもおほくしたてて釣に出でて侍れば、此夕なぎにのりては、さはに得てかへりなむ。時もうつりぬるに、朝食は心よく参りてまたせ給へ。よき物作りおきてさむらふ」とて、ほし魚などよきさまにつくりてすゝめければ、「さらば夕食にはたがはで真魚たうべさせよ」とて、朝食はくひたり。いとうれしくおもひて、「衣のいたくひりかけなどしてぬれ

ひぢて侍るを、今の間に洗ひてあぶりほしてきせ参らせむ。是めせ」とて、ときほどきて侍るものをきかへさせ、かのくさき衣をもち出でて、\*石井いはいの侍るにいきて、そぎあらはむとおもひて居立ちて侍るに、鳶とびのかけり来て、何にかあらむめのまへにとりおとしたるに、魚のいまだいきてあるがをどりめぐるなり。いとうれしくてとらへてみれば、二尺ふたぢかばかりなる鱒子ぶりことふ魚也ける。唯ゆめのさまにおもひなりて、まづそをもち来て煮もし焼きもして参らせければ、翁はかぎりなくよろこばひてけり。

そもく此をみな翁につかへて侍りけるまめ心の深きに、(3) 神々のめでさせ給ふとおもふさまの事のくさく奇しき事侍る中にも、此ことをもはらに人いひながしけるほどに、終つひには国の守きこしめして、いとあつくかづけものたまひていたはり給ふ。

注(\*)

泣いさち||泣きわめき。

石井||岩間から湧く水を利用した洗い場。

問一 傍線部(1)～(3)を現代語訳せよ。

(26点)

問二 傍線部Aについて、

(イ)この問題文では、どのような例が挙げられているか、説明せよ。

(12点)

(ロ)そのことはどのような形で解決したのか、説明せよ。

(12点)

出典

建部綾足たけべあやぢ『折々草』冬の部「若狭の国の老女を云条いみだり」(参考 岩波書店『新日本古典文学大系79』)

解答

問一 (1) どうにかしていい魚を手に入れたいものだなあ

(2) 波に打ち寄せられた魚などがいないわけがない

(3) 神々が褒めたたえていらっしやるのだと思われるような、いろいろ不思議なこと

問二 (イ) 冬に七日もしけが続いて漁師は仕事を休み、どこの海岸

でも魚が手に入らないときに、翁が生きのいい魚を食べたいと言いつ出したこと。

(ロ) 神々が女の孝心に感心なされたので、鳶が生きた魚を捕らえてきて女の前に落とす、という奇跡が起きた。

解説

今回の文章の概要

舅への孝心がもたらした奇跡

- ・若狭の国の貧しい女が、舅である老翁に誠実に仕えていた
- ・老翁は老化のためか、季節はずれの食べものをほしがるがよくあったが、必ずその言葉どおりの食事を作ってあげていた
- ・冬で海が荒れ、漁師も海に出られない頃、老翁が魚をほしがった
- ・どんなに魚を探しても見つからなかったが、鳶が生きた魚を捕らえてきて女の前に落とす、という奇跡が起きた

・女の老翁への孝心の深さゆえに起きた奇跡だ、と人々が言い広め、藩主の耳に入り、褒美の品を賜った

建部綾足(一七一九～七四)は、弘前藩の武士だったが、兄嫁との不倫がもとで出奔し、故郷も身分も捨てた放浪の風雅人として生涯を送った。約二〇年にわたってほとんど全国を巡った旅の記録は、『紀行』と総称する一五の紀行文となつて残されている。これに対して『折々草』は、晩年の五三歳のとき、それまでの人生で見たこと、聞いたこと、考えたことのみを、それぞれ独立した三五の短い文章に書き下し、春夏秋冬の四部にふり分けて編集した文集である。

問題文は冬の部の最初の作品から採った。国学を学んだこともあつてか、ところどころに古めかしい言葉づかいが見られるが、同時代の雅文や俳文によく見られる過剰な文飾がなく、事実をありのままに述べた平明な文体である。なお、途中一部省略した箇所がある。

問一 (一) 「いかにもして」は、下に願望の語を伴って「どうにかして・ぜひとも」の意。「真魚」の「真」は「真心・真名(≡漢字)・真中」などの「真」で、〈完全だ・すぐれている〉などと褒めたたえる意味の接頭語だから、現代語なら「お魚」とでも言うところか。「てしがな」は願望を表す終助詞「てしが」(古くは「てしか」)に、感動を表す終助詞「な」が付いたもので、〈……たいものだなあ〉という意味。

(2) 「波にうちよせられて侍る」の下に「魚」を補う。「侍る」は、この場合、敬語としては意味をなさないので、単に「居る」の雅語的

表現と考えるとよい。「なから」は形容詞「なし」の未然形。「まし」は反実仮想の助動詞だが、中世以降は推量の助動詞「む」と同じ意味に用いられるようになる。「や」は反語で、「ないことがあるのか、いや、あるはずだ」という意味になる。

(3)「めで(↓めづ)」は「褒める・感心する」。傍線部の前の「(女)の(まめ心(=誠実な孝心))を神々が褒めている、というのである。「させ給ふ」と、尊敬の助動詞、補助動詞を重ねて、神々に最高の敬意を表している。「とおもふさまの事」は、「そう思う(思われる)よいうなこと」。その下の「の」は同格の助詞で、次の「くさぐさ(奇しき事)」と二つの「事」を述べている。「くさぐさ」は「いろいろな・さまざま」。「奇しき事」は「奇異・不思議・神秘」。この女には、これまでもさまざまな不思議、奇跡が起きていた、というのである。その中でも今度の奇跡については人々が盛んに語り伝えたので、国守の耳にまで達した、と続く。

問二 (イ) 傍線部は、「翁が朝夕の食べ物などに時節はずれのことを所望してどうしようもないことが何度もあった」という意味。年若い翁は、その食べ物がいま手に入るかどうかという判断ができなくなって、食べたいと思いついたものをそのまま注文するのである。具体例は次の段落の最初の二文に示されている。翁の望みは「真魚のいとよきをたうべむ」、つまり、**お魚のいいのを食べたい**、ということ。後の方で、代わりに「ほし魚」を食べさせたとあるから、「よき」というのは「生きがいい」という意味に解すべきだろう。ところがその前の箇所には、**季節は冬、風雨で海上も荒れて、漁師たちも仕事を休**

んでいたとき、とある。また後の方には、**七日ほど時化が続いて、この海岸へ行っても魚は手に入らない**、とある。生きのいい魚はまさに「時ならぬもの」だったのである。

(ロ) 端的に言えば、次の段落末に示されているとおり、**鳶が生きた魚を捕らえて飛んできて、女の前に落としていったのである**。ただ、それだけ答えたのでは、単なる偶然、幸運ということにしかならない。だが、傍線部(3)に続けて「……奇しき事侍る中にも、此ことをもはらに人いひながしける」とある。「此こと」とは鳶の話を指すはずだから、筆者はそれを、**女の舅への孝心を神々が愛でたために起きた奇跡**としてとらえているのだ。そう言えば、女は最初から「天地の神にこひのみ(=祈り願い)」(l 8)、そのききめがないと「神の申すことをきこしめさぬ也」(l 11)と思っていたのだから、鳶が魚を落としたり、それは当然神のはからいだということになる。解答にはそのことを必ず付け加えなければならない。

### 京大の求めるレベル

問題文は長いが、ストーリー展開は明確。登場人物と彼らに起こった出来事を整理しながら読んでいこう。

現代語訳では、正確な逐語訳が最も重要だが、問題文全体の文脈を押さえ、ニュアンスを踏まえた訳出ができるとさらによい。

## 全訳

若狭の国三方郡早瀬というところに、とても貧しい状態で住む女で、名は糸という者が、舅の老爺に仕えた行為の誠実なことといったら、他に例を見ない貞節さであるという。

老爺は七十歳ほどで、世に言う老化などのせいなのか、心も愚かになって、幼稚な子供のように泣きわめき、**A 朝晩の食べ物などは季節はずれのことを注文して仕方のないことが何度もあったが**、少しもその老爺の言葉にそむかずに作ってあげた。

冬の時分なので、風が吹き荒れ時雨が降って海上もたいそう荒れて、漁師たちも仕事を休んで大変嘆かわしく思っていた頃に、この老爺が「お魚のうんと生きのいいのを食べたい」と言い出したが、七日ほども時化の日が続いていたので、魚と言ってはこのあたりの海辺ではどこへ行っても手に入れるすべもない。そうは言っても、魚はないともいえないと言いがないので、天地の神にお願いして、**(1) なんと**かして**お魚を手に入れたものだ**と祈ったが、ききめもない。ともかく海岸を歩きまわって見たら、**(2) 波にうち寄せられている魚など**もない**ことがあるか**、と思いついたので、とても寒い朝風に吹かれてあちらへ行きこちらへ行きして見たけれども、魚のようなものは見つからない。「これは、私の心が汚れているために、神様が私の申すことをお聞き入れにならないのだ。いまはもう仕方がないから、なんとかおじいさんをなだめすかして、空のきげんや海の心が良くなりなされるまでは、ともかく何か作ってさしあげよう」と考えたので、泣か**んばかりの気持ちで家に帰ると、老爺はののしりわめいて、「お魚が**

食いたい、食いたい」と泣いていた。この女は背中をさすって、「いましがた漁師たちが舟をたくさん用意して釣りに出ましたから、今日の夕なぎに乗ずればたくさん獲って帰ることでしよう。時間も過ぎたので、朝食は気持ちよく召し上がってお待ち下さい。おいしいものを作っておきました」と言って、魚の干物などおいしそうに作ってすめたので、「それなら夕食には間違いないとお魚を食べさせてくれ」と言って、朝食は食べた。たいそううれしく思って、「着物が随分おしっこをかけたりにぬれていきますから、いまのうちに洗って火で乾かして着せてあげましょう。これをお召し下さい」と言って、解いて仕立て直しておいた着物を着替えさせ、その臭い着物を持ち出して、岩井のあるところに行つて洗濯しようと思つて座つたり立つたりしていると、鳶が飛んできて、何であろうか目の前に取り落としたら、魚のまだ生きているのがはねまわっていたという。大変うれしくて捕まえてみると、二尺ばかりのブリという魚なのだ。ただもう夢のような気持ちになって、まずそれを持ってきて煮もし焼きもしさしあげたので、老爺はこの上なく喜んでいた。

いったい、この女が老爺に仕えていた実直な心が深いので、**(3) 神々がお褒めになるのだ、と思われような、いろいろ不思議な**ことがある中でも、このことを専ら人々が言い広めたので、最後には藩主がお聞きになって、たいそう手厚く褒美の品をお与えになり苦勞をねぎらいなされる。